

キリストに倣いて

（ルカによる福音書14：7～14、イザヤ書57：15）

今朝は、ルカによる福音書14章7節から14節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「客と招待する者への教訓」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。ここには、主イエスがお話しになった二つの譬えが出て来ます。一つの譬えは、昼食会に招かれた客に対して語られたもの、今一つは、昼食会を開いて客を招いた家の主人、その人に、与えられたものです。場所は、前回の続きで、ファリサイ派の或る議員の家のようにも見えるのですが、招かれているのは、仲間のファリサイ派の者たちや律法の専門家たち（3節参照）ではなく、12節の言葉から推察するに、「(家の主人の)友人、兄弟、親類、近所の金持ち」たちのようですから、前回とは、別の機会、別の場所、と考えた方が、筋が通るように思われます。勿論、友人の中には、ファリサイ派の人たちや、律法の専門家たちが入っていたとしても、何も可笑しくはありません。彼らのプライドの高さから考えて、ここでもやっぱり、話のきっかけは、彼らが取った行動にあった、と見て間違いはなさそうです。彼らなら、如何にもやりそうなことだからです。今日の箇所は、こう書き出されています。「イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された」と。以前主イエスは、ルカによる福音書11章37節以下で、ファリサイ派の人々と律法の専門家らとを厳しく非難されたことがありました。が、その中で、「あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好むからだ」（43節）、と言われていました。何処に行っても、上席に着くことは、改めて、考え直すまでもないことのように、殆ど、彼らには、習性化していたのでしょう。だから、この度も、当然の如く、誰よりも先に、上席に着こうとしたのです。これを御覧になっていた主イエスは、彼らを諭すために、一つの譬えを語られたのです。8節以下を読んでみましょう。

「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、あなたやその人を招いた人がやって来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる」。大体、今日（こんにち）の、日本人である、私たちの感覚からすれば、婚宴の席と言うものは、始めから決まっているのが常識です。ただ行って、その席を探せばいいだけです。でも、その分、これを準備する人たちは、随分と苦勞するのではないのでしょうか。失礼はないか。大切なお客さんを、席順を間違えたばかりに、不快にして、以後の人間関係が拙いものになってしまう、と言うことは、大いに起こり得ることだからです。でも、古代、中近東では、婚宴の席順は、最初から決められていない、と言うことは、別に、特別なことではなく、普通のことであったようです。だから、こうした譬えも、聞く者に、違和感なく受け入れられたのです。日本の場合を考えると、先ず、誰だって、人に勧められない限り、自分で、最初に、上座に座る、と言うことは、殆ど考えられません。先ず、最初は、末席に座るのではないのでしょうか。「どうぞ、どうぞ」と、強く、強く促されて、やっと、重い腰を上げて、上座に進む、と言うのが、大方の日本人の習性だ、と言って、決して、過言ではないのではないのでしょうか。でも、そうは言っても、最初から決められ

た席が、もし、末席だったら、恐らく、粗略に扱われた、と、先ず、大抵の者は、あからさまではないにしても、腹を立て、深く、根に持つのではないのでしょうか。こうして考えると、決して、私たちは、ファリサイ派の人々のことを、笑えない自分を、認めざるを得ないのです。

ところで、この譬えは、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と言う、格言のような言葉をもって締め括られています。日本にも、「驕る平家は久しからず」と言った諺がありますが、それと同様、一般的な知恵の言葉を、主イエスは、ここで授けられた、とも受けとられかねません。特に、「同席の人みんなの前で面目を施すことになる」などと、主イエスが言われた、と聞くと、尚更、その思いは強くなります。しかし、そうではないのです。主イエスは、ここで謙譲の美德とか、心得ておくべきエチケットとか、奥ゆかしい振る舞いについて、語られたわけではないのです。これこそは、神を知る者の、特に、キリストを信じる者の、当然とるべき態度だからなのです。

今日は、聖書朗読の折り、旧約聖書からはイザヤ書57章15節、一節のみを、読んでいただきました。あそこには、こう述べられていました。「高く、あがめられて、永遠にいまし/その名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く、聖なる所に住み/打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり/へりくだる霊の人に命を得させ/打ち砕かれた心の人に命を得させる」と。高く聖なる所に住んでおられる神は、さぞや、人間にも、御自身と同じように、高くなること、聖なる者となることを、求められるのか、と思いきや、実は、その反対で、打ち砕かれて、へりくだる霊の人とこそ、共にあろうとされる、と言うのです。同様に詩編の51編19節でも、「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊/打ち砕かれ悔いる心を/神よ、あなたは侮られませんが」と、歌われています。旧約に於いても、高ぶる者を、主なる神は、退けられ、却って、高ぶる者らに蔑まれ、虐げられる者たちにこそ、御目を留め、彼らを愛おしみ、受け入れられるのです。

旧約に於いてもそうなのです。況してや、新約に於いては尚更のことで、ルカによる福音書22章24節以下には、主イエスの地上に於ける御生涯が、今、正に十字架をもって終わろうとしている、その寸前になっても尚、弟子らは、何と、自分たちの内で、誰が一番偉いだろうか、と、互いに議論を交わしていた、と言うことが記されています。その時、主イエスはこう言われました。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者ようになり、上に立つ人は、仕える者ようになりなさい」と。ヨハネによる福音書13章1節以下によると、その後守られた最後の晩餐の席では、何と主イエスは、実際に、上着を脱ぎ、手拭いを取って腰に纏い、それから、盥に水を汲んで、弟子たちの足を洗い、腰に纏った手拭いで拭かれた、と言うのです。ユダヤでは、当時、靴は皆サンダルでしたから、外を歩けば、足は直ぐに汚れました。その汚れた足を洗うのは、奴隷のやる仕事だったのです。友人同志でも、足を洗い合う、と言うようなことは、普通あり得ないことでした。況してや、先生が生徒の、師が弟子の、足を洗う、などと言うことは、天地がひっくり返っても、決して起こり得ぬことでした。しかし、主イエスは、弟子たちに対し、それをやられたのです。それは、主イエスと言うお方は、「仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(マルコ10:45)と、言われるようなお方であったからでした。そんなお方でいます主イエス・キリストを称えて、初代教会は、こんな讃美歌を作りました。それをパウロは、自分が書いたフィリピの信徒への手紙の2章6節以下に、そのままそっくり引用しました。有名な、“キリスト讃歌”と呼ばれている、あの歌です。そ

れはこうです。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです」。これが、我らが主と崇めるイエス・キリストだ、とするならば、それとは全く反対の生き方など、当たり前感覚の持ち主なら、最早、とてもできないのではないのでしょうか。でも、それを忘れて、つい奢ってしまうのが、私たちの有り体の姿なのです。だから、主イエスのお言葉は、人ごととして聞き流すことは、何処まで行っても、できないのです。そのことを思うと、「我が持てる すべてはキリストに 賜いしを、今日も忘れて、心奢りぬ」と歌った、三浦光代さんの短歌が、しきりに思い出されてまいります。

次の譬えに移ります。12節以下を読んでみます。「また、イエスは招いてくれた人にも言われた。『昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる』」。随分極端な勧めです。時々、主イエスは、聞く者の心に強く響くよう、極端とも思われるような誇張法を用いられました。だから、極端さに心を奪われて、主イエスの真意を見落とす危険があります。主イエスは何も、親しい者たちとの会食を禁じられたのではありません。これはあくまでも、譬えなのです。この譬えをもって、何を伝えたかったのかと言うと、お返しを求めて、愛した所で、その愛に、一体如何ほどの価値がると言うのか、と言うことなのです。既に、私たちが学んできたルカによる福音書6章27節以下に、「敵を愛しなさい」と言う小見出しがついた箇所がありました。あの箇所の32節以下を、ここで、再度、読み直してみたいと思います。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるろうか。罪人でも同じことをしている。返してもらおうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるろうか。罪人でさえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」。今日の箇所の二つ目の譬えは、これを言い換えただけに過ぎないのです。尤も、「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」が、直ちに、敵だとは言えません。愛すべき人たちも、中には、沢山いるはずですが、しかし、彼らは、気持ちはあっても、貧しさ故に、お返しができないか、或いは、そんなこと自分たちの分に非ず、と考えて、当然の如くしない、と言う点では、敵と同じです。何のお返しがなくても愛する、それが本当に愛する、と言うことではないのか、と言うのが、主イエスが仰りたかったことなのです。

これも、既に、私たちが学んできた箇所ですが、ルカによる福音書10章25節以下に、「善いサマリア人」の譬え話が出て来ました。あそこに出て来た善いサマリア人とは、実は、主イエス・キリストを暗示していたのですが、その最後は、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言う、主イエスのお言葉をもって、締め括られていました。あなたが主

イエス・キリストにしてくださいと同じように、あなたもしなさい、と言うこと、それが、今日の、この個所の一番のポイントなのです。つまり、あなたの主でいますイエス・キリストに倣いなさい、と言うことなのです。

今日は、そんなわけで、説教題を「キリストに倣いて」と、致しました。この説教題は、お気づきの方も多かろうと思うのですが、伝統的に、中世期のオランダの修道僧、トマス・アケンピスが書いたとされている、同名の書物から拝借したものです。この本は、日本では、柚木康牧師（1896～1985年、日本基督教団東中野教会主任牧師として50年間在任）が、日本語に自ら訳して、紹介しておられます。柚木康牧師は、パルカルの”瞑想録”（パンセ）を始め、色々なパスカルの著書の邦訳を手掛け、その外にも、パスカルについての様々な紹介文を残しておられて、パスカルの研究者としても有名な方なのですが、また、讃美歌の作詞家、翻訳家としても、大きな業績を残された方です。作詞された沢山の讃美歌の中でも、私たちにとって、一番馴染みが深いのは、何と言っても、121番ではないでしょうか。その2節では、このように歌われています。「食するひまも うちわすれて、しいたげられし ひとをたずね、友なきものの 友となりて、こころくだきし この人を見よ」と。そして、続いて3節では、「すべてのものを あたえしすえ、死のほかなにも むくいられで、十字架のうえに あげられつつ、敵をゆるしし この人を見よ」と。これほどの的確に、しかも、誰もが分かる平易な言葉で、更には、日本人の私たちにもピンとくる韻を踏んで、イエスの御生涯を、言い著わした歌詞も、少ないのではないのでしょうか。しかし、確かに、聖書を読む限り、実に、これこそが、我らの主イエス・キリストが歩まれた御生涯だったのです。

この讃美歌は、繰り返し、繰り返し、「この人を見よ」、「この人を見よ」と、訴えています。「見よ」とは、眺めて、ただ「凄いなあ」と、感心せよ、と、言っているのではないのです。このようにして主イエスに愛されたあなた方も、これをお手本として生きなさい、と言っているのです。

(三輪恭嗣)